

健康科学大学と富士河口湖町との地域連携活動について (平成 25 年度)

地域連携推進委員会

坂本宏史 佐藤真一 小林一彦
瀧口綾 成田崇矢 大瀧雅世

Collaborative activities of Health Science University with Fujikawaguchiko town in 2013

SAKAMOTO Hiroshi, SATO Shinichi
KOBAYASHI Kazuhiko, TAKIGUCHI Aya
NARITA Takaya, OTAKI Masayo

抄 録

この報告では、平成 25 年度に本学が行った地域連携活動を振り返り、「地域連携協定」に基づいて到達度を総括した。今年 6 月に富士山が世界文化遺産に登録されたことで、本学の地元地域も多くの脚光を浴びることとなった。河口湖畔の清掃活動も、大がかりなイベントとなり、本学学生と富士河口湖の有志で行って来たウォーク・クリーニング隊もその活動に参加した。「包括連携協定」の目的でもうたわれている「知的財産の共有」に関連して、本学教員が講師として、地域住民に向けた「富士河口湖町・健康科学大学 地域連携講座」、町役場の職員が講師として本学学生に対して開く授業「地域連携の理論と実際」が今年度も行われた。一方、今年度は天候などの影響で、予定の変更を余儀なくされる事業もあった。

キーワード：地域連携

包括的連携協定

知的財産の共有

ボランティアセンター

1) はじめに

今年4月当初に渡辺凱保富士河口湖町町長と牧野順四郎本学学長をはじめ、連携事業に関わる各部署の代表が出席し、第1回の「拡大地域連携推進委員会」が開かれた。平成21年に締結された「包括連携協定」に基づいて行われて来た活動の報告や、「包括連携協定」を支える体制が確認された。また学長からは、毎年連携活動を冊子に纏めることが提案された。

今年6月に富士山が世界文化遺産に登録されたことで、本学の地元地域も多くの脚光を浴びることとなった。河口湖畔の清掃活動も、大がかりなイベントとなり、本学学生と富士河口湖の有志で行って来たウォーク・クリーニング隊もその活動に参加した。

この報告では、平成25年度に本学地域連携推進委員会が関わった活動をまとめ、「地域連携協定」の目的に基づいて、到達度を総括し、課題を明確にした上でその解決方法を検討したい。

2) ボランティアセンター



図1 学生ボランティア活動の様子 (a-d)
a : 富士河口湖町生涯学習課企画のプレイパークのプレイリーダー
b, c : ウォーク・クリーニング隊
d : 山梨放送から依頼された富士五湖美化ウォーク

近隣地域の各種団体からのボランティアに関する情報をボランティアニュースとして、本センター登録者に発信する一方で、ボランティア活動の大切さを学生に伝えている。本年度のボランティア登録者数は 266 名（9 月 30 日現在）、ボランティアニュースもすでに 60 号発行している（10 月 28 日現在）。

また今年度も、4 月、当センター登録者、登録希望者を対象に「ボランティア登録者のオリエンテーション」を行い、ボランティア活動の概要や、ボランティア活動保険制度の説明を行った。

富士河口湖町役場とまちづくりワークショップとの連携で行われたウォーク・クリーニング隊をはじめ、様々な河口湖畔の清掃活動に、多くの学生ボランティアが参加した。（図 1 a - d）

3) 富士河口湖町・健康科学大学地域連携講座

地域連携事業の大事な柱の一つである本事業は、本年度で 5 年目を迎えた。

今年は 10 月 13 日（日）と 10 月 27 日（日）に、それぞれ、健康科学大学 B 101 講義室と、富士河口湖町役場コンベンションホールを会場に企画された。

第 1 回〔10 月 13 日（日）開催〕は、「糖尿病の予防と治療」と題して、昨年に続いて町内の糖尿病専門医（小舘秀介氏）を迎え、やはり糖尿病を専門とする石黒友康学部長の二人で、講演を行った。糖尿病の概要、予防法、治療法についてそれぞれの専門の立場から丁寧な解説がなされ、積極的な質疑応答も行われた。第 2 回は、富士河口湖町誕生祭の一企画として、呼吸器の健康改善を目指し、本学理学療法学科教員による講座「禁煙のすすめ」、理学療法学科の学生も手伝って「呼吸器の健康度検査」などを行う予定であったが、町の誕生祭自体が荒天のため中止となったため、地域連携講座は後日の開催となった。（図 2 a - d）

4) 地域連携の理論と実際

二年前開講した本講義は、本学に地域行政の専門家である富士河口湖町の職員を講師に招いて、「行政全般」、「福祉」、「文化」、「健康増進」などにかかわる町の取り組みや課題を紹介してもらうものである。「包括連携協定」が結ばれたことによって開講できる大変特色のあるものである。昨年までは、カリキュラム上、福祉心理学科福祉学系学生のための選択科目であったが、今年度から総合基礎科目のひとつとなり、広く全学科の学生が受講できるようになった。今年度は 4 回の講義を聴いて、特に興味をもった項目や課題をについて、グループ単位で町役場職員や担当教員の指導を受けながら、調査・研究を行い、最終的に研究発表会を行った。



図2 10月13日本学で行われた地域連携講座の様子 (a-d)

地域連携の柱となりうる特色のある事業にもかかわらず、昨年度は受講生が極端に少なかった(4名 福祉心理学科)。上述のようにカリキュラム上の科目分類の変更や、開講日時の検討を行い、本年度は54名の履修申請を得た。

5) 遊休農地活用事業

一昨年度から始まった本事業は、これまで同じ体制〔NPO「だんだん」、富士河口湖町役場職員ボランティア、本学ボランティア学生および職員〕で行われた。

今年は小麦やポップコーン用のコーン(爆裂種)、数種の野菜を育てた。

しかし本年度は、天候不順や、鳥害により、小麦とコーンがほぼ全滅となり、農作物の管理の難しさを改めて知った。また昨年度と同様、収穫した野菜を富士河口湖町の誕生祭や食育祭で出品するよう準備していたが、誕生祭は荒天のため中止となった。

大根など農作物の一部は町内の特別養護老人ホーム・高齢者住宅で利用してもらっている。また、昨年度の報告の後、町内の高齢者施設からの希望にこたえるため、本事業で収穫したそば粉を使った蕎麦の食事会を開いた。この際、地域の主婦の方に蕎麦の打ち方の手ほどきも受けた。(図3 a-c)

6) 富士河口湖ボランティアネットワーク協議会

平成 22 年度に発足した本協議会（構成：本学ボランティアセンター、富士河口湖町政策財政課・生涯学習課、社会福祉協議会、富士河口湖高校ボランティアサークル、河口湖畔教職員組合）は、本年度も月に一度、定例的に開催された。地域の行政と大学との連携に加え、小中学校が参加することによって生まれる利点や可能性について情報や意見の交換



図3 遊休農地事業（a－c）、ボランティアネットワーク協議会の活動（d－f）

- a：種まき
- b：除草作業の様子
- c：夏の収穫物
- d：富士河口湖町社会福祉協議会が開催した、避難所運営ゲーム（HUG）講習会に参加した時の模様
- e，f：健康科学大学文化祭（蒼麓祭）に、ボランティアネットワーク協議会のメンバーとボランティア学生で模擬店を出した

を行っている。前述の遊休農地活用事業も本協議会が発端であった。

写真(図3 e, f)は、ボランティアネットワーク協議会で、本学文化祭に模擬店を出した時の様子である。

7) 考察

ボランティアセンター

昨年度、学生にボランティア活動を促すために、ボランティア活動自体が履修単位として認められる科目や、ボランティア活動に参加することを単位習得の条件にした科目ができたことで、ボランティアセンター登録者数は一挙に増加した。しかし、その後継続的にボランティア活動に参加する学生数は以前とあまり変わっていない。一方で、何度も熱心に活動に参加している学生も見られる。

富士河口湖町・健康科学大学地域連携講座

昨年度、合同の町誕生祭・本学文化祭で第2回の地域連携講座を開催した経験をもとに、今年度は、すべての講座を大学や町のイベントの一つの企画として開催することを試みた。第1回は本学文化祭(10月13日)、第2回は町の誕生祭(10月27日)の中で開催することとした。

10月13日に開催された連携講座は、昨年度の本講座で新たに連携関係ができた町内の糖尿病専門医の小館秀介医師を再び迎え、一步踏み込んで糖尿病の予防へ向けての講座となった、また今回の講座を終え、今後も引き続き、地域の健康増進に協力して取り組むことの確認ができた。

地域連携の理論と実際

本講座の開講(一昨年度)以来、受講者が少なかった課題について、昨年度、本学連携推進委員会で検討した結果、本科目の履修上の分類に問題があり、作業療法学科および理学療法学科の学生が受講しにくいことが明らかになった。委員会では今年度学生が履修申請をするまでに、科目の分類の変更の手続きを終え、各学科必修科目を確認した上で開講日時を調整した結果、受講生の増加につながった。また、学生に本講義の価値を理解してもらえるよう、履修ガイダンスの折の説明も効果があったと思われる。

遊休農地活用事業

今年度も、昨年同様、遊休農地で収穫する農作物を学内の実習や、大学文化祭の折の模擬店の食材に供することを目的に栽培を試みたが、鳥害や天候不順などのため、初めて失敗を経験することになった。暑い夏の農作業のおり、みずみずしいスイカを収穫できたことも救いであったが、本事業に関わったものにとって、農作業の難しさを改めて体験できたことも長い目で見れば収穫であったと思われる。

さらに多くの学生の興味ひいて、参加してもらえるよう努力したい。

富士河口湖ボランティアネットワーク協議会

前述したとおり、本連携に関係する事業の多くのことがこの協議会において計画されてきた。月に1度定例的に開催されるため、構成員同士の連絡も密であり、各事業への迅速な対応も可能な体制である。

昨年の課題であった、本協議会の活動を大学や町役場に広く伝えることも、4月に第1回目として開催された「拡大地域連携推進委員会」を続けることで解決されると考えられる。

参考文献

地域連携推進委員会 石黒友康 他：富士河口湖町との地域包括連携における大学の役割、健康科学大学紀要 Vol. 7, 35-49, 2011.

地域連携推進委員会 坂本宏史 他：健康科学大学と富士河口湖町との地域連携活動について（平成 23 年度）健康科学大学紀要 Vol. 8, 129-138, 2012.

地域連携推進委員会 坂本宏史 他：健康科学大学と富士河口湖町との地域連携活動について（平成 24 年度）健康科学大学紀要 Vol. 9, 105-112, 2013.

Abstract

The current study reviews the collaborative activities between the Health Science University and the town of Kawaguchiko in 2013. The study evaluates the goals stated in the agreement, 'Agreement on Community Collaboration,' Recent Mt. Fuji's recognition as a UNESCO World Heritage draw a lot of attention to Kawaguchiko, which is located at the foot of Mt. Fuji. In such a situation, the cleaning activities for the Kawaguchiko lakeside have become a large-scale event. 'Health Science University Walk Cleaning Troops' which consist of group of students and community volunteers joined such cleaning activities. In terms of the 'Co-ownership of Intellectual Property,' listed in the agreement, lectures aimed at community members were organized by university professors. Meanwhile, the governmental officers in the community provided the lecture, 'Theory and Practice of Community Collaboration,' to the students. The study also found that some projects had to be cancelled due to harmful weather conditions.

Key words : community collaboration

agreement on community collaboration

co-ownership of intellectual property

volunteer center